



宮崎大学学術情報リポジトリ

University of Miyazaki Academic Repository

「確かな学力」を育成する方法としての連携型小中
一貫教育実践：
宮崎県西諸県地区2市1町での質問紙調査における自
由記述回答の検討から

メタデータ	言語: jpn 出版者: 宮崎大学教育文化学部 公開日: 2020-06-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 助川, 晃洋, 遠藤, 宏美 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10458/5029

「確かな学力」を育成する方法としての 連携型小中一貫教育実践

—宮崎県西諸県地区2市1町での質問紙調査における
自由記述回答の検討から—

助川 晃洋*¹・遠藤 宏美*²

**Enhancement of “Solid Academic Prowess” and
Combined Education Practices in Elementary and Junior High Schools :
Results of the Free Description Questionnaires in Two Cities and a Town,
Nishimorokata District, Miyazaki Prefecture**

Akihiro SUKEGAWA and Hiromi ENDO

I 研究の課題とその設定経緯

近年の我が国では、義務教育改革、あるいは地域教育改革の試みとしての小中一貫教育が、急速に普及しつつある。それを導入・推進する必要性（理由）は、自治体の事情や関係者の立場に応じて、様々に理解されている。しかし、小中一貫教育が、公立小・中学校の取り組みである以上、児童・生徒の「確かな学力」の育成、より通行の言い方をすれば、学力向上を図ることこそが、共通の重点目標であって然るべきである。平成20（2008）年3月改訂の小・中学校学習指導要領は、学力向上を明確に志向しており、すべての学校と教師に対して、その問題に真正面から向き合うことを求めている。小学校学習指導要領が中学校学習指導要領を、中学校学習指導要領が小学校学習指導要領を同一冊子内に収めていることから敷衍すれば、小中一貫教育に対してもまた、児童・生徒の学力向上に資する方法としての期待が、政策サイドから寄せられていると考えることが可能である。

では、小中一貫教育実践の現場においては、児童・生徒の学力向上を目指して、どのような取り組みが行われているのであろうか。この問いに対する回答を提示するために、筆者（助川・遠藤）は、連携型小中一貫教育を行っている宮崎県西諸県地区2市1町、すなわち小林市、えびの市、高原町の全公立小・中学校、合計36校（小：21校、中：15校）を対象として、平成24（2012）年7月から平成25（2013）年6月にかけて、全17項目に及ぶ質問紙調査を順次行った。その回答結果は、自治体別には遺漏なく報告済みであるものの⁽¹⁾、広域的な視点からは、多肢選択式（単一と複数の両回答方式を含む）の質問項目を網羅する一方⁽²⁾、次の項目については、あえて考察の埒外としたため、いまだ取り上げるに至っていない。

1. 貴校および中学校区では、小学校から中学校への「進学」に際し、学習状況や学力実態に関してどのような引き継ぎを行っていますか。その内容や様式について、具体的にお教えてください。〔Ⅱ-1で考察。以下同様〕

*¹ 宮崎大学教育文化学部

*² 明治学院大学言語文化研究所

2. 中学校区の児童・生徒の学習や学力について、小・中学校の教職員の間では日常的にどのような機会に、どのような情報交換がなされていますか。情報交換の機会やその頻度、情報の内容などについて、具体的にお教えてください。〔Ⅱ－2〕
3. 貴校では、新学習指導要領を踏まえて「確かな学力」を育成するために、小中一貫教育を通してどのような取り組みを行っていますか。貴校での取り組みについて、以下に具体的にご記入下さい。
 - (1) 基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させるために〔Ⅲ－1〕
 - (2) 思考力・判断力・表現力等を育成するために〔Ⅲ－2〕
 - (3) 学習意欲を向上させるために〔Ⅲ－3〕
 - (4) 学習習慣を身につけさせるために〔Ⅲ－4〕

これらの質問項目に対する回答は、いずれも自由記述によるものであり、選択式の場合に比べて、実践の事実をより直接的に反映している可能性がある。結果を集計して、数値化することにはなじまない。その内容を検討する機会を、別個に設ける必要があるのではないか。本研究は、このような考えに基づいて遂行されるものであり、その成り立ちから明らかなように、注(2)で挙げた拙稿とは、相互補完的な、あるいは相即不離の関係にある。ただ、回答はあくまでも「自由」記述であるため、「当該質問に回答がない」ことと「実践を行っていない」こととは必ずしも一致しないことに注意したい。

なお、以下では学校名は匿名とし、アルファベットの大きい文字で中学校区を表すこととする⁽³⁾。すべての回答は論文の最後に資料として提示するので、適宜参照願いたい。

Ⅱ 児童・生徒の学習状況と学力実態に関する情報交換

1 中学校進学時の引き継ぎ(資料1)

中学校進学時の引き継ぎに関する回答からは、次のような特徴が読み取れた。

(1) 時期

引き継ぎを行う時期として最も多く見られた回答は、「3月下旬」、「3月末」、「春季休業中」などといった、年度末から年度当初にかけてである。より具体的には「卒業式後」や指導要録の「抄本を受け渡しの際に」など、小学校卒業後、中学校に入学する前に行うケースが見られる。また、次のような回答をした中学校区もあった。「新入生説明会の際に、小学校6年生の学級担任や特別支援学級担当と生徒指導上、確認が必要な児童についての打合せを行った。年度末に詳細について打合せを行い、新年度に入り、再度、学級担任となった中学校職員と打合せを行う」(えびの市J中学校区)。年度末から年度当初にかけて引き継ぎを追加して行うこのケースは、全体から見れば稀である。

なお、引き継ぎの回数は通常1回で、所要時間は約1～2時間程度が多いようである。

(2) 担当(出席)者

引き継ぎの際、ほとんどの中学校区で、当該児童を最もよく知る教員である「小学校6年生の担任」が小学校側の担当者として出席している。受け入れる中学校側は、「中学校職員」もしくはただ「中学校」との回答が多く見受けられ、「中学校新1年生担任」や「中学校の新入生担当」と回答した学校は少なかった。すなわち、小学校側の引き継ぎの担当者は特定の学年(6年)を受け持つ教員にほぼ限られている一方、中学校側では担当者をあまり

限定していないようである。その他の関係者として、「養護教諭」（小林市C中学校区、同F中学校区）、「教務」（小林市I中学校区）、「特別支援学級担当」（えびの市J中学校区）などが同席するケースがある。

なお、引き継ぎを行う場所についての記述はほとんどなかったが、回答があったものを抜き出すと、中学校で行っているケースが4、小学校で行っているケースが1であった。

(3) 引き継ぎの内容

ほとんどの中学校区で「学習面、生活面」について少なくとも「口頭で」引き継ぎを実施している。具体的に見ると、特に配慮や支援が必要な児童についての伝達（小林市A中学校区、同G中学校区、同H中学校区、えびの市L中学校区）、「体力・健康状態、家庭環境」（小林市C中学校区）、「リーダー性、気になる面、スポーツ、ピアノ等芸術面、保護者の状況」（小林市F中学校区）、「CRTや単元別テストを基にした学力実態、授業中の様子を基にした学校での学習状況、家庭学習診断表の結果や課題の提出状況を基にした家庭での学習状況」（小林市G中学校区）、「交友関係や保護者についての情報交換」（高原町N中学校区）などがあり、「指導法の継続も含んだ引継」（えびの市J中学校区）を行っている中学校区もあった。これらの引き継がれた情報は、特に複数の小学校から進学する場合の学級編成にも活かされているようである（小林市C中学校区、えびの市L中学校区、高原町N中学校区）。

引き継ぎの場には、小学校側が資料を用意しているケースが多いとみられるが、「様式については、中学校からの提案形式に沿って対応している」（小林市A中学校区）、「中学校から、『学習の様子』『行動の様子』『出欠』を書くプリントが来ます」（えびの市K中学校区）といった中学校区もあり、中学校側が必要な情報の提供を小学校に求めているケースもある。

2 日常的な情報交換の機会（資料2）

(1) 機会の種類と内容

ほとんどの中学校区で行われているのは小中合同の（職員）研修会であり、「教科別の班構成で授業研究会」（小林市A中学校区）や「各学校の児童の実態について各学年からの口頭での情報交換や各種検査についての研修会」（小林市B中学校区）、「NRTについては、小中学校で資料を作成し、共通理解を行っている」（えびの市L中学校区）ことなどが行われ、児童・生徒の学力実態を共有することに力を入れている。またそこでは「小中学校職員混合の班」（小林市G中学校区）や「小中合同教科部会」（えびの市L中学校区）を設定するなど、小・中学校教員が混じりあうような編成がなされている。

そのほかの機会には「研究主任会」（小林市A中学校区）、「小中合同担当者会」（小林市G中学校区）、「合同分掌部会」（えびの市K中学校区）などがある。また、「授業参観月間を設定し、お互いの授業や児童生徒の学ぶ様子を自由に参観できる機会をつくっている」（小林市C中学校区）など、教員どうしの情報交換だけではなく、互いの児童・生徒の様子から直接情報を得る機会も設けようとしている中学校区もある。さらに、「小学校に指導に行っている教諭が、小学校についての情報交換を行い、中学校で知らせてくれる」（えびの市J中学校区）、運動会や立志式など小中合同の学校行事の際に「学力の実態や学校・家庭での学習状況について情報交換を行っている」（小林市G中学校区）など、互いの学校

を行き来したり、合同で何かを実施したりする機会を捉えて、積極的に児童・生徒の情報交換を行っている様子が見て取れる。

(2) 頻度

調査の対象とした2市1町は連携型の小中一貫教育に積極的に取り組んでいることもあり、どの中学校区でも小中合同の職員研修が少なくとも学期に1回程度、多くは月1回の割合で実施されている。最も多い中学校区では月2回程度、年に20回以上に及んでいるという(小林市F中学校区、同H中学校区、えびの市K中学校区)。しかし、小・中学校間では合同研修を行うための時間を調整することが難しい。そこで、特に夏季休業中に「別途数回」(小林市A中学校区)のように時間を確保して合同研修を行う中学校区が複数見られた。

Ⅲ 「確かな学力」の育成をめざす共通実践

1 基礎的・基本的な知識・技能の確実な習得(資料3-1)

基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させるために小中学校が合同で実施していることとして多く挙げられたのは、漢字や計算のドリルやテスト等に取り組ませること(小林市H中学校区、えびの市J中学校区)や「学習の決まり」等を合同で作成し実践していること(小林市C中学校区、同H中学校区)などであった。

また、中学校入学前に中学校からの課題に取り組ませる(小林市I中学校区、えびの市L中学校区)、小学校での学習の定着を確認するテスト等に取り組ませる(えびの市K中学校区、同M中学校区)、小学校で学習した内容を中学校の授業の導入で想起させる(小林市A中学校区)など、小学校での学習内容を確実に中学校に引き継いでいくような実践がなされている。さらに「中学校のサマースクールに小学校職員が参加し、小学校の内容が十分理解できていない生徒に対して指導や声掛けを行っている」(小林市B中学校区)など、小学校教員が児童の卒業後の様子を把握し、フォローするシステムを設けている中学校区もあった。

2 思考力・判断力・表現力等の育成(資料3-2)

思考力・判断力・表現力等の育成のために小中学校が合同で取り組んでいることとして、小中合同の研修会や合同テーマで行う授業研究会などが多く挙げられた(小林市C中学校区、同F中学校区、えびの市J中学校区、同K中学校区、同L中学校区、高原町O中学校区)。

実際の教育活動で具体的に挙げられた取り組みには、「言語活動を中心として、自分の言葉でまとめる活動を重視」(小林市A中学校区)、発表の仕方や話型表の活用(小林市D中学校区、同G中学校区)、「ノート指導の在り方でめあて(問題)と結論・まとめを記録するように小中統一している」(えびの市M中学校区)などがあつた。

3 学習意欲の向上(資料3-3)

学習意欲を向上させるための取り組みには、大きく3つがあるようであつた。1点目は、授業の導入で児童・生徒の興味・関心を高める工夫をすることである(小林市A中学校区、同G中学校区、同I中学校区)。2点目は逆に、授業の終盤で賞賛を行うことである(小林市C中学校区、えびの市M中学校区)。これらを意識し、「めあて」と「まとめ」をできるだけ設定した授業を展開するとともに、小中学校で同じような板書に取り組んでいる中学校区もある

(高原町N中学校区)。

3点目が最も多く、小学校で中学校教員による乗り入れ授業を実施することや中学校への一日体験入学等を通じて、中学校での学習に対する児童の不安を解消し、学習意欲を喚起させることである(小林市A中学校区、同B中学校区、同C中学校区、同D中学校区、同G中学校区、同H中学校区、えびの市L中学校区、高原町O中学校区)。小学校での学習が中学校の学習とどのように関連しているのかを知らせる取り組みをしている中学校区もあった(えびの市J中学校区)。

4 学習習慣の定着(資料3-4)

学習習慣の定着について、ほぼすべての中学校区で共通に行っている実践がある。それは9年間を見通した「家庭学習の手引き」を小中合同で作成し、全家庭に配付し、家庭の理解・協力を得ることである。それに付随して、参観日の懇談会で取り上げて保護者に説明・啓発を図ること(小林市C中学校区、えびの市L中学校区)や、「家庭学習診断表」等の定期的な状況調査を実施すること(小林市D中学校区、同G中学校区)などがある。

家庭での学習のほか、授業での学習習慣の定着を図る取り組みとして小中一貫して行っているのは、立腰指導(小林市A中学校区、同E中学校区)、「生活の決まり」や「学習の約束」の指導(小林市F中学校区)、ノート指導の在り方の共通理解や学習中の姿勢、返事の仕方などの統一(えびの市M中学校区)などがある。

IV 研究のまとめと今後の課題

本稿では、西諸県地区2市1町における小中一貫教育実践に関する自由記述回答から、小学校と中学校の教職員の間で行われる情報交換(進学時の引き継ぎを含む)や、「確かな学力」を育成するために小中一貫の視点から行っている取り組みを把握した。

小学校から中学校に進学する際の引き継ぎでは、主に年度末に6年担任と中学校教職員によって、児童の学力や学習状況にとどまらない広い範囲の児童の情報が伝達されている。日常的には、定期的開催される小中合同の職員研修の際に、児童・生徒の学力実態の共有や情報交換がなされている。さらに乗り入れ授業の担当教員を通じた情報交換なども行われ、小学校と中学校との間で情報伝達の機会をできるだけ多く設けようとしている。

「確かな学力」の育成のためには、次のような取り組みが見られた。漢字・計算ドリルや「学習の決まり」など小・中学校で共通した実践を行うほか、小学校と中学校とが連携して小学校での学習内容の定着を図り、中学校へ引き継いでいくような取り組みにより、基礎的・基本的な知識・技能の確実な習得を目指していた。思考力・判断力・表現力の育成のためには、中学校区単位で授業研究に取り組み、実際の授業に活かしている。同様に、授業の構成を工夫することにより学習意欲を向上させようとする取り組みのほか、教員の乗り入れ授業などにより中学校での学習への不安を解消させることにも力を入れている。また、学習習慣の定着を図るため、中学校区で「家庭学習の手引き」を作成し家庭にも理解・協力を求めている。このように、学力向上に向けて、小中一貫の仕組みを活用して「確かな学力」を育成する取り組みがなされているうえ、これらの取り組みにはある程度共通した形が見られることがわかった。

本稿をもって西諸県地区2市1町の小中一貫教育の全体把握を終えたことになるが、小林市

で最初に調査を行ってからすでに2年近くが経とうとしている。この間、小林市に限らずえびの市、高原町の各中学校区で小中一貫教育実践がより進展したり、成果や反省を踏まえてバージョンアップが図られたりしていることであろう。今後も引き続きこれらの自治体の小中一貫教育の取り組みを注視するとともに、他市区町村で実践されている小中一貫・連携教育との比較を試みたい。また、質問紙調査では実態を的確に把握するには限界がある。教職員へのインタビューや授業参観等も含め、各学校の実践に立ち入った調査と分析・検討が今後の課題である。

注

- (1) 遠藤宏美・助川晃洋 「宮崎県小林市の連携型小中一貫教育実践における学力向上の取り組み－質問紙調査による全体状況の把握－」 『宮崎大学教育文化学部紀要（教育科学）』第28号 宮崎大学教育文化学部 平成25（2013）年3月 pp.19-60.
遠藤宏美・助川晃洋 「連携型小中一貫教育実践における学力向上の取り組み－宮崎県えびの市での質問紙調査から－」 『宮崎大学教育文化学部紀要（教育科学）』第29号 宮崎大学教育文化学部 平成25（2013）年8月 pp.23-54.
遠藤宏美・助川晃洋 「連携型小中一貫教育実践の状況調査－宮崎県高原町における学力向上の取り組みについて－」 『宮崎大学教育文化学部紀要（教育科学）』第30号 宮崎大学教育文化学部 平成26（2014）年3月 pp.1-27.
- (2) 助川晃洋・遠藤宏美 「連携型小中一貫教育実践の広域的・校種別実態把握－宮崎県西諸県地区2市1町における学力向上の取り組みに着目して－」 『宮崎大学教育文化学部附属教育協働開発センター研究紀要』第22号 宮崎大学教育文化学部附属教育協働開発センター 平成26（2014）年3月 pp.1-12.
- (3) 中学校は大文字アルファベットで、小学校は対応する小文字アルファベットで表している。また、1つの中学校区に複数の小学校がある場合は、それらを番号によって区別している。

資料1 中学校進学時の引き継ぎ

小林市	A中学校区	A中学校	・入学前に6年生の担当と中学校の新入生担当が引き継ぎ会を実施し、特に配慮が必要な子どもの情報交換を行っている。 ・また、夏季休業中にそれぞれ学校の学力の実態について情報交換を行っている。
		a 1小学校	・資料等を準備して、小学校の担任と、中学校の担当が直接話し合いを行っている。
		a 2小学校	・3月末に学習状況や生活態度、人間関係などについて情報交換を1時間半ぐらいかけて引き継ぎを行っている。 ・様式については、中学校からの提案形式に沿って対応している。
	B中学校区	B中学校	・2時間程度の時間で6年生担任と新1年生担任が打ち合わせを行う。
		b 小学校	・6学年担任が、卒業式後に中学校の研修会において職員全員へ引き継ぎを行っている。 ・小学校で行っている学力検査の結果について、中学校にも伝え分析を行っている。
	C中学校区	C中学校	・年度末に、中学校で、小学校学担・養教（それぞれ2校）に来てもらい、情報交換するとともに、中学校1年の学級編成について、アドバイスをしてもらっている。
		c 1小学校	・小学校6年担任が中学校職員と情報交換をする場を3月に設定している。
		c 2小学校	・3月下旬（春季休業中）に、学習面、生活面、体力・健康状態、家庭環境等についての連絡会を実施し、口頭で説明して引き継ぎを行っている。
	D中学校区	D中学校	・年度末に担当の教師どうして引き継ぎを行っている。内容は、学習、生活、身体健康、保護者についてである。
		d 小学校	・中学校が小学校に来て、学習面、生活面、健康面から1時間程度引き継ぎを行っている。
E中学校区	E中学校	・春休みに口頭で。	
	e 小学校	・1校のみ（1小1中）の進学であり、日常的な引き継ぎがなされているが、3月末に引き継ぎ会を実施している。	
F中学校区	F中学校	・指導要録の写しを中学校へ。 ・児童の状況を中学校へ（学習、リーダー性、気になる面、スポーツ、ピアノ等芸術面、保護者の状況）。 ・年度末に小学校の担任と、中学校の職員（1年担任、養護教諭）へ引き継ぎ会。	
	f 小学校	・年度末に、6学年担任と中学校新1年生担任、養護教諭が集まり、引き継ぎ会を行っている。小学校担任がCRTテストの結果や児童の人間関係、家庭環境等の資料を準備している。	
G中学校区	G中学校	・CRTや単元別テストを基にした学力実態、授業中の様子を基にした学校での学習状況、家庭学習診断表の結果や課題の提出状況を基にした家庭での学習状況等を、生徒（児童）一人一人ていねいに引き継ぎしている。	
	g 小学校	・小中学校連絡会議（3月末）を行い、学担より学力検査等の結果や特に配慮の必要な児童についての伝達を行っている。	
H中学校区	H中学校	・合同研修会および合同授業研究会。 ・6年生の担任と中学校職員との引継ぎ。	
	h 1小学校	・中学校教諭と年度末に引き継ぎの時間を設定し、CRTをもとに学習達成度状況を伝えるとともに、支援を要する児童に対する指導のあり方を協議している。	
	h 2小学校	・年度当初に中学一年生の学習状況や実態把握を行うため、中学校で小・中連絡会を実施している。 ・年度末に小・中連絡会をもっている。	
I中学校区	I中学校	・小学6年生の学級担任と中学校側職員（学年職員、教務）と小学校作成の資料による引き継ぎを行っている。	
	i 小学校	・年度末に小・中学校の担当者で引き継ぎを行っている。内容は①学力面②身体面③人間関係面④家庭環境面⑤成育歴⑥指導要録等である。	
えびの市	J中学校区	J中学校	・新入生説明会の際に、小学校6年生の学級担任や特別支援学級担当と生徒指導上、確認が必要な児童についての打合せを行った。年度末に詳細について打合せを行い、新年度に入り、再度、学級担任となった中学校職員と打合せを行う。
		j 小学校	・一年をおとして、NRTやCRTなど、学習状況についての連絡会を行い、随時情報を共有し、指導法の継続も含んだ引き継ぎをしている。
	K中学校区	K中学校	・新入生説明会によるテストの実施。 ・小6学担との引き継ぎ。
		k 小学校	・年度末に、6年担任と中学校教員で引き継ぎをしています（中学校から、「学習の様子」「行動の様子」「欠欠」を書くプリントが来ます）。
	L中学校区	L中学校	・特に支援の必要な生徒について口頭で説明してもらう。
		l 小学校	・6年担任と中学校担当者が3月末に、学力、運動能力、リーダー性等を考慮して作成した学級編成資料を基に引き継ぎを行っている。
M中学校区	M中学校	・抄本を受け渡しの際に、一人一人の児童の学習状況及び学力の実態について6年担任から中学校の担当が説明を受けている。	
	m 1小学校	・引き継ぎ会を実施し、学習指導・生徒指導上の留意点を確認している。	
	m 2小学校	・小中合同研修の中で学力検査結果分析について報告している。 ・2～3月に小中連絡会を実施し、個別の学習状況等について連絡し、連携を図っている。	
高原町	N中学校区	N中学校	・小学校6年の担任と中学校が一緒になって中1のクラス編成としている。
		n 1小学校	
		n 2小学校	・年度末に中学校区で担当職員が集まって情報交換をし、引き継ぎ事項の確認をすることで、中学校の学級編成やその後の指導に生かしている。
	n 3小学校	・学習面・生活面の状況だけでなく、交友関係や保護者についての情報交換を行っている。	
	O中学校区	o 小学校	・6年生の学級担任が、中学校に来て、学習面、生活面についての引き継ぎをしている。

資料2 日常的な情報交換の機会

小林市	A中学校区	A中学校	・本中学校区では、月に1回程度（夏季休業中は、別途数回）の小中合同の研修会を実施している。本年度は、教科別の班構成で授業研究会を行っている。情報の内容としては、問題解決的な学習を中心とした指導法についてが中心である。
		a 1小学校	・月1回の合同研修会。 ・月に1回の企画会。 ・不定期の研究主任会や校務分掌部会。
		a 2小学校	・夏季休業中に中学校区で実施したNRT学力検査結果の分析を行い、全体会でその結果の傾向を報告する。 ・報告の過程で部会を3回全体会を1回開いた（平成23年度）。
	B中学校区	B中学校	・月に1回、おおまかな内容で話し合っている。
		b小学校	・月1回の小中合同研修会で、各学校の児童の実態について各学年からの口頭での情報交換や各種検査についての研修会を行っている。
	C中学校区	C中学校	・NRT（標準学力検査）の結果・分析結果を共有化することで、今後の指導の焦点化、充実を図る。
		c 1小学校	・月1回以上、小中一貫教育に関する研修会を設定し、実態分析や手だてについて協議を行っている。 ・また、授業参観月間を設定し、お互いの授業や児童生徒の学ぶ様子を自由に参観できる機会をつくっている。
		c 2小学校	
	D中学校区	D中学校	・合同研修会（月1回程度に、標準学力調査などの対外的なテストや校内の定期テスト、日常の授業での様子について情報交換を行っている）
		d小学校	・月1回の合同研の時や、週に1回程度小学校に授業にくる時に話をする。主に授業内容や児童の様子などについて話をしている。
	E中学校区	E中学校	・学期1回程度。
		e小学校	・ICT教育の研究指定を両校、受けているので合同研修会や研究授業等連携は良好である。
	F中学校区	F中学校	・NRTの分析、検討、今後の対応（小中合同研）特に夏季休業中に時間をとって。
		f小学校	・小中合同研修会を月2回程度実施し、研究班や教科班に分かれて、共通実践していく内容や学力などについての情報交換を行っている。
	G中学校区	G中学校	・小中合同研修会（年間13回程度）や小中合同担当者会（月1回）、小中合同の学校行事（小中合同運動会、小中合同米作り、小中合同参観日、小中合同立志式）の際に、学力の実態や学校・家庭での学習状況について情報交換を行っている。
g小学校		・小中合同で研究主題及び副題を設定し、小中学校職員混合の班を編成し、研修を深めている（年間12回程度）。	
H中学校区	H中学校	・合同研究会等の実施（年10回程度）。	
	h 1小学校	・月2回の合同研修会において、本中学校区児童生徒の学力の実態を加味した手立てを、知育部を中心に話し合い対策を打っている。	
	h 2小学校	・情報交換会を年3回、合同研修会を年に23回設定している。	
I中学校区	I中学校	・小中合同研修会を17回行っている。うち半分以上が知育に関することで学力の分析や総合授業参観等を行い、児童・生徒の全体的な傾向や個別の情報交換を行っている。	
	i小学校	・小・中合同研修会において実施、年間17回、学力を分析する調査研究班が担う。学力分析はNRTテストの結果を扱う。	
えびの市	J中学校区	J中学校	・小学校に指導に行っている教諭が、小学校についての情報交換を行い、中学校で知らせてくれる。
		j小学校	・年に7回、合同研修会を行っている。Q11の補足と同じ。
	K中学校区	K中学校	・小中学校間の日常的な交換は行っていない。 ・その他NRTの小6～中3までの成績の分析（年1回）、新入生テストによる小6の学力の確認を行っている。
		k小学校	・K小中学校では研修を合同で行ってます。年間25回で、合同研修会（主題研）、合同職員会、合同分掌部会等を実施しました。
	L中学校区	L中学校	・月に1度の小中合同研修会で行っている。特に、4月に行われる、NRTについては、小中学校で資料を作成し、共通理解を行っている。
		l小学校	・月1回程度行っている小中合同研修会で時間を設定し、情報交換を行っている。 ・夏季休業中の研修に小中合同教科部会を設定し、NRT等の結果を分析したり、落ち込みに対する対策を検討したりしている。
	M中学校区	M中学校	・小中合同研修会を本年度は8回実施した。その中で情報交換をしている。また、本校から各小学校に音楽と英語表現科の授業に行っているため、その際にも情報交換ができています。
		m 1小学校	・年間8回の小中合同研修会を水曜日の研修の時間に設けている。 （内容） ・授業研究会3回（m-1小、m-2小、M中各1回） ・部別・班別研究会 ・習得内容研究部会（基礎的・基本的な内容の習得：国語、算数・数学、英語班） ・環境改善研究部会（学びを支える力の向上：家庭学習・ノート活用班）
			m 2小学校
	高原町	N中学校区	N中学校
n 1小学校			
n 2小学校			・中学校区単位では、特に行っていない。一貫教育研修会の際に、町全体の学習状況についての報告が、町教育委員会よりある。
n 3小学校		・定期的に研修の時間を設定し、情報交換を行っている。	
O中学校区		O中学校	・小中合同の職員研修を月に1～2回設定し、知育・徳育・体育の三部会に分かれ研修を行っている。
o小学校	・小中一貫教育における、小中合同研修会の知育部会で、情報交換や授業研究、学習技能の系統についての協議等を行っている（年10回程度）。		

資料3-1 基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させるために

小林市	A中学校区	A中学校	・各教科の導入の段階等で、小学校で学習した内容を想起させ授業を実施している。定着の悪い内容については、くり返しの学習や家庭での週末課題として補充している。
		a 1小学校	・主題研究において、小中合同の教科部会を設けている。
		a 2小学校	・学力向上に向けて、中学校区で共通の研究主題を設定し、これまでの3年間で言語活動の充実の視点から学習指導の方法を考えたり、義務教育9年間を見据えて、各教科の指導プラン（学習の系統性）を作成して活用したり、3校合同授業研究会を実施したりした。
	B中学校区	B中学校	・中学1年では、小学校の内容の復習を多く行っている。
		b 小学校	・中学校のサマースクールに小学校職員が参加し、小学校の内容が十分理解できていない生徒に対して指導や声掛けを行っている。
	C中学校区	C中学校	・NRT分析を、小中合同教科部会で行い、落ち込みのみられる部分に重点をおいて指導している。
		c 1小学校	・授業研究会を設定している。
		c 2小学校	・算数・数学科において共通した「ノート作成のきまり」を設定し、共同実践を行っている。
	D中学校区	D中学校	・業前の時間を活用して国語、算数を中心として、プリントやドリルに取り組みさせる時間を設定し、全職員で指導にあたり、基礎的基本的な内容の定着を図っている。
		d 小学校	・小中合同の主題研究のもと、業前に時間を設け、基礎・基本的な知識・技能の習得を図っている。
E中学校区	E中学校	・学力向上合同研修会にて検討している。	
	e 小学校	・ICT（教育）を活用した学力向上を同一テーマで研究実践している。	
F中学校区	F中学校	・「学習のきまり」を作成し、基礎学力の向上を目指している。	
	f 小学校	・「学習のきまり」を作成し、基礎学力の向上を目指している。	
G中学校区	G中学校	・単元別の学力検定問題を作成し実施することで、苦手としているところや理解が不十分なところを明確にし、その内容を復習する機会を設けている。	
	g 小学校	・スキルタイムを設定し、計算・漢字等の繰り返し指導を行っている。	
H中学校区	H中学校	・読書タイム（朝の活動20分間、週2回）、読みきかせ（地域ボランティアの方による、朝の活動20分間、月2回程度を設定し、読書活動を推進している。	
	h 1小学校	・NRT、CRTをはじめとする諸検査の分析を行い、小中合同で基礎・基本を習得させるための学習を実施している（各教科及び長期休業中等）。	
	h 2小学校	・「学習のきまり」を小中合同で作成し実践している。	
I中学校区	I中学校	・プリントコーナーを小中合同で設置し実態に応じて活用させている。	
	i 小学校	・中学入学前に小学校の内容を復習している。	
J中学校区	J中学校	・小学校卒業時に春休みの課題を4教科課している。	
	j 小学校	・個別指導	
		・NRTの分析 ・家庭学習の充実	
K中学校区	K中学校	・J漢字文字力向上テストをはじめとして、各教科で連携した取組を行っている。	
	k 小学校	・漢字や計算の技能を高めるために、小中高合同で、漢字テストや計算テストの問題を作成し、実施している。	
		・9年間の系統表の作成を行い小中間の関連性の確認を行った。	
L中学校区	L中学校	・各教科において、創意工夫を行ってもらっている。	
	l 小学校	・中学校一日入学の祭に、中学校教諭が作成したテストを受ける。	
M中学校区	M中学校	・新入生に対して、春休みの課題を中学校から配付している。	
	m 1小学校	・ドリル等、児童・生徒を鍛える時間を授業内・外で設定している。	
	m 2小学校	・中学校入学までの学年末、春季休業中に、中学校からの課題を準備し、小学校の学習内容の確認、定着を図る機会を設けている。	
N中学校区	N中学校	・基礎学力コンクールを行い、小学校内容を復習し、基礎・基本の徹底を図っている。	
	n 1小学校	・視写に取組み、書くことへの抵抗感をなくし、語彙を増やし、文章筆記方法の習熟を図っている。	
	n 2小学校	・県web評価問題に取組み、習熟を図っている。	
	n 3小学校	・クラスルームイングリッシュの習熟を図っている。	
O中学校区	O中学校	・身に付けさせるべき能力や態度について小1から中3まで各教科ごとに系統性を考え一覧表を作成して、それに基づいて小中統一した授業を行っている。	
	o 小学校	・学習の記録の確認（保護者からのコメント）	
		・問題解決的な学習の展開を原則とし、めあてとまとめを設定するとともに、構造的な板書に取り組んでいる。	
高原町		・9年間を3期に分け知育における重点目標を立てるとともに、各校で実施している標準学力テスト（NRT、CRT）の分析、活用を図っている。	
		・少人数の学校であることを生かして「個に応じた指導」を常に行っている。	
		・「話す、聞く、書く」学習技能の系統表作成	

資料3-2 思考力・判断力・表現力等を育成するために

小 林 市	A 中学校区	A 中学校	・小中9年間をスパンとして、問題解決的な学習を中心として授業を進めている。特に、言語活動を中心として、自分の言葉でまとめる活動を重視している。
		a 1 小学校	・言語活動の充実のための取組をしている。
		a 2 小学校	・ワークショップ型の話し合い活動を小中学校で取り入れて指導を行うとともに学習のまとめを子ども自身に作らせるようにした。
	B 中学校区	B 中学校	
		b 小学校	
	C 中学校区	C 中学校	
		c 1 小学校	・「活用する力」に関する授業研究を行っている。
	D 中学校区	c 2 小学校	・表現力については、業前の時間を使って、学年部ごとに発表の機会をつくり、音読や朗読の発表、合唱や楽器演奏などを実施している。
		D 中学校	・言語活動に着目した取組を行っている。
	E 中学校区	d 小学校	・発表の仕方など中学と共通のものを作成し、指導している。
		E 中学校	・ICTを活用している。
		e 小学校	・同上（ICT（教育）を活用した学力向上を同一テーマで研究実践している。研究テーマ「ICTを活用した学習指導の在り方」～機器の操作と効果的な活用方法の探求を通して～）。
	F 中学校区	F 中学校	・「活用する力」をテーマに小中合同で研修会の実施。
		f 小学校	・「活用する力を身に付けさせる」ことを研究テーマとして掲げ、計画的に研究授業を実施し、参観したり、ワークショップ型の事後研究会を取り入れたりしながら、思考力、判断力、表現力の育成を図ろうとしている。
	G 中学校区	G 中学校	・小中一貫した「問題解決的な学習の流れ」を作成し、実践している。
g 小学校		・授業において、問題解決的な学習を実践している。 ・自力解決の時間の確保や話型表の活用により、自分の考えをもち、表現し、話し合うことのできる指導の工夫を行っている。	
H 中学校区	H 中学校		
	h 1 小学校	・協同的な学習を位置づけた問題解決的な学習過程を小中合同で研究し実践している。	
	h 2 小学校	・各種の校外のコンクール等に積極的に参加している。	
I 中学校区	I 中学校	・問題解決的な学習を展開している。	
	i 小学校	・論理的に説明する機会を単位時間に必ず設定する。	
J 中学校区	J 中学校	・表現力の向上のため、1分間スピーチの時間を全学級で設定して実践している。	
	j 小学校	・問題解決的な学習について、小中合同で研修を行い、一貫した指導を行っている。	
K 中学校区	K 中学校	・主題研究（小中合同）のテーマを表現力の育成を目指した取り組みとした。	
	k 小学校	・言語活動を重視した（取り入れた）授業の創造を合同研究の柱にした。	
L 中学校区	L 中学校	・話し合い活動を取り入れた授業を多く実践することで、言語活動の充実を図っている。	
	l 小学校	・小中学校でそれぞれ合同の授業研究会を実施し、思考力、判断力、表現力の育成に向けた授業改善について協議している。	
M 中学校区	M 中学校	・小中合同研修において「活用する力」を身につけさせるための取組を研究し、指導方法の工夫等の実践を行っている。	
	m 1 小学校	・学び合いに力点を入れ、授業に取り組んでいる。	
	m 2 小学校	・9年間を見通した家庭学習の手引きを作成している。 ・ノート指導の在り方であって（問題）と結論・まとめを記録するように小中統一している。	
N 中学校区	N 中学校		
	n 1 小学校		
	n 2 小学校	・問題解決的な学習指導過程を、「導入」、「展開」、「終末」の3段階でとらえ、そのいずれかの段階に「自己表現の場」を設定している。また、その際にICTを活用している。	
	n 3 小学校		
O 中学校区	O 中学校	・小中合同の研究主題の副題に『「知育」・「徳育」・「体育」での伝え合う活動を通して』と設定し、「伝え合う」という部分を様々な場面で意識して、教育活動に取り組んでいる。	
	o 小学校		

小
林
市え
び
の
市高
原
町

資料3-3 学習意欲を向上させるために

小林市	A中学校区	A中学校	・子どもたちの知的好奇心をあおりながら、課題を設定している。また、学習内容と日常生活との関連を図り意欲を高めている。
		a 1小学校	・実際に中学校で、中学校の先生による授業を受ける機会を設けている。
		a 2小学校	・中学校区で導入の工夫に力を入れることにしている。
	B中学校区	B中学校	・年間50時間程度、小学校6年生が中学校へ体験登校を行っている。
		b 小学校	・中1ギャップの解消を図り、中学校進学に対して不安を解消することで、中学校入学に向けた意欲の喚起を行うことを目的として、6年生が登校から下校まで丸1日中学校で生活する習慣を年間に2回程度設定し、中学校の教師と小学校の教師によるITでの授業を行う。
	C中学校区	C中学校	・小学校に向向いて、中学校での学習の仕方等を話す機会を設定している。
		c 1小学校	・特に算数・数学科において、授業の終盤に習熟をはかる時間を設定し、教師はできるようになったことをほめるようにしている。
		c 2小学校	
	D中学校区	D中学校	
		d 小学校	・中学校の先生に授業に入ってもらい（高学年 5年外国語、6年外国語、算数、4年理科）、学習意欲を高めている。
	E中学校区	E中学校	・ICTを活用している。
		e 小学校	・同上（ICT（教育）を活用した学力向上を同一テーマで研究実践している。研究テーマ「ICTを活用した学習指導の在り方」～機器の操作と効果的な活用方法の探求を通して～）。
	F中学校区	F中学校	
		f 小学校	
	G中学校区	G中学校	・兼務教員による小学校での継続的な授業の実施、兼務教員以外の教員による小中合同参観日（小中交流授業）等における小学校の授業の実施を通して、学習への意欲を高めている。
g 小学校		・立腰指導（聞く姿勢の徹底指導）や授業での導入段階の指導の工夫により、学習意欲の向上を図っている。 ・授業での児童ひとりひとりへの声かけや賞賛を行う。	
H中学校区	H中学校	・知育部、徳育部、体育部、食育部において、小中合同部会を開催し、特に知育部と徳育部を中心とした教育の実践を推進している。	
	h 1小学校	・協同的な学習を授業に位置づけ、グループ全員が助け合い、同じ目標に向かって活動する雰囲気づくりに心がけている。	
	h 2小学校	・中学校への一日入学を年2回、計5日取り入れている。	
I中学校区	I中学校	・導入で生徒の興味・関心を高める工夫をしている。	
	i 小学校	・導入の在り方を研究している（主題研究において）。	
えびの市	J中学校区	J中学校	・授業の指導過程の中で、生徒が発表しやすい問題を出題したり、教材研究を行っている。
		j 小学校	・中学校のどの学習につながるかを児童に知らせたり、キャリア教育の観点から小中合同の学習会（本年度は、小4～中2）を設定したり、先輩などの講話の中に学習への取り組み方についての話しを入れたりして、学習への意欲を高めている。
	K中学校区	K中学校	・系統表を生かした授業を行うようにしてもらっている。
		k 小学校	
	L中学校区	L中学校	・授業中に、学習内容が、職業や別の単元とどうつながっていくのかに触れる。
		l 小学校	・英会話科や音楽科の授業において、中学校の教員が小学校での乗り入れ授業を行っている。
	M中学校区	M中学校	・小学校において英語表現科を実施して、学習への意欲を高めている。音楽科についても同様である。
		m 1小学校	
		m 2小学校	・自己評価や学習の終わりに感想を書かせ賞賛を行っている。
	N中学校区	N中学校	・授業のねらいやまとめのキーワードなど、同じように板書をしている。
		n 1小学校	
		n 2小学校	・中学校区共通の「学習のやくそく」を徹底するとともに、ICTを学習内容に応じて効果的に活用し、学習への意欲を高めている。
		n 3小学校	・小中学校の系統性のある授業づくりに向けて、「めあて」と「まとめ」をできるだけ設定した展開をするなど、問題解決的な学習による主体的意欲を持たせるようにしている。
	O中学校区	O中学校	・中学校教師の小学校への「乗り入れ授業」を通して、「中1ギャップ」の軽減や、基礎学力アップの取り組みを行っている。
		o 小学校	・中学校教員による小学校授業への乗り入れ。

資料3-4 学習習慣を身につけさせるために

小林市	A中学校区	A中学校	・望ましい学習習慣を身につけさせるために、小学校から9年間一貫して継続指導を続けている。
		a 1小学校	・共通の家庭学習の手引きを活用している。 ・「立腰指導」に合同で取り組んでいる。
		a 2小学校	・中学校区で共通した学習習慣の中から腰骨を立てた、立腰指導を行っている。 ・家庭学習の手引きを共通して作り、9年間で育てるポイントを示して家庭に配付し、定着を見届ける週間を毎月位置付けている。
	B中学校区	B中学校	・9年間使える「家庭学習の手引き」を作成し、配付している。
		b 小学校	・9カ年を見通した話し方や聞き方、立腰指導等について「基本的な授業の受け方」を作成し、共通理解を図りながら指導の徹底を図っている。
	C中学校区	C中学校	・小中合同で作成した家庭学習の手引きを学年別に再編集（1～4、5～中1、中2～中3）して配付している。
		c 1小学校	・家庭学習の手引きを作成し、各家庭に配付している。また、家庭学習ふりかえり週間を設定し、学習習慣が身につくよう、指導している。
		c 2小学校	・小中一貫教育の取組の1つとして、小1から中3までの発達段階に応じた「家庭学習の手引き」を作成し、各家庭、児童・生徒に配付し、啓発を行っている。年度当初の参観日でも懇談会の内容として取り上げ、説明して啓発を行っている。
	D中学校区	D中学校	・家庭でのよりよい生活リズムを身につけさせるため、定期的なアンケートを行っている。
		d 小学校	・中学校とのつながりを考え9年間を通した「家庭学習の手引き」を作成し、徹底を図っている。
	E中学校区	E中学校	・立腰に力を入れている。
		e 小学校	・市の施策に則り、同上のような共通実践を行っている
F中学校区	F中学校	・小中一貫した「生活のきまり」「学習の約束」を指導している。	
	f 小学校	・「家庭学習の手引き」を作成し、全家庭に配付している。	
G中学校区	G中学校	・9年間を見通した「家庭学習の手引き」を作成し、家庭に配付している。また、保護者と児童・生徒を対象に「家庭学習診断表」による家庭学習の状況調査を行い、中間報告等を通して啓発を図っている。	
	g 小学校	・9ヶ年を見通した「自学の姿」を意識させるために、「家庭学習の手引き」を作成し、児童生徒や保護者に配付し、啓発するとともに共通実践をしている。	
H中学校区	H中学校	・小中合同で家庭学習の進め方について検討し、手引を作成し、実践している。	
	h 1小学校	・「家庭学習のきまり」を小中合同で作成し実践している。 ・PTAと連携した学力向上への取り組みを行っている。	
	h 2小学校	・好ましい自宅学習時間を各学年毎に設定し、守るよう指導している	
I中学校区	I中学校	・「家庭学習の手引き」を小中合同で作成中。	
	i 小学校	・家庭学習の手引きをH23に作り家庭に配付している。平成24年度に小中一貫したものも作る計画である。	
えびの市	J中学校区	J中学校	・小中学校で、指導事項を確認して同じ内容や発展事項について指導する。
		j 小学校	・家庭学習のしおりを小中合同で作成し、9年間分の表をつくり、家庭訪問時に配付している。また、個人面談を夏季休業中に行い、学習状況を知らせ、家庭学習への啓発を行っている。さらに、「小中高一貫教育だより」にも家庭学習の在り方について掲載している。
	K中学校区	K中学校	・学習の手引きの作成。 ・家庭学習のやり方等について例を示した。
		k 小学校	・「家庭学習の手引き」（9年間）を作成、配付した。
	L中学校区	L中学校	・小中連携して、家庭学習の手引きを作成し、家庭に配付している。
		l 小学校	・小中9年間を見通した「家庭学習の手引き」を作成し、全家庭に配付している。 ・参観日の懇談で取り上げ、意識化を図っている。
M中学校区	M中学校	・小中一貫して使える家庭学習の手引きを作成して配付している。	
	m 1小学校	・家庭学習の手引きを作成し、活用している。 ・小中一貫系統一覧を作成し、学習習慣の定着を図っている。 ・ノート指導の在り方を共通理解し、授業に生かしている。	
	m 2小学校	・生徒指導の充実を含め、学習習慣や態度の育成を行っている。小中一貫したものを設定している。「ゲー・ベタ・ピン」の合いことばで学習中の姿勢や手のあげ方、返事など細かく統一している。家庭にも指導方針を説明している。	
高原町	N中学校区	N中学校	・高原っ子幸せになる10の法則をつくって実践している。
		n 1小学校	
		n 2小学校	・「家庭学習の進め方」を作成し、一貫教育保護者部会の活動と連携を図りながら、「家庭学習3つのルール」の定着を目指して取り組んでいる。
	n 3小学校	・「家庭学習の進め方」を全家庭に配付し、保護者の協力をあおいでいる。	
	O中学校区	O中学校	・「家庭学習の手引き」を作成し、家庭に配布している。
o 小学校		・「ノーマディア（TV、ゲーム）デー」を設定し、家庭への意識づけを行っている。	

(2014年5月7日受理)